

モーツアルトの「トルコ行進曲」よく知られている。私のイメージとしては、余分な音を排除し、最小限の音だけを浮かび上がらせるゼイ肉のない音楽である。研ぎ澄まされた感覚勝負になるのか。すごく軽やかに弾いている。中間部のメロディーでは、こんなに早く弾かなくてもいいのに思うほど駆け足である。サビの部分ではエキセントリックに演奏することもナイ。また、悪魔のササヤキが命じた不協和音を強調することもナイ。あくまでも真摯で素直である。それも一つのアプローチ。最後近く、クライマックスの合間にウラのメロディーをすごくエレガントでキレイに響かせた。今まで誰からも聴いたことがない、とても素敵な瞬間だった。

リストの「ため息」何のための。キレイな旋律にウットリしての、いや、思いが募ってのモノなのか、ワカラナイ。「愛の夢」と共通するものを感じるが、演奏しているのをみると大変である。最初の展開部、沢山の余分な音の交通整理が必要である。ラッシュアワー。猛スピード、大型・小型車混交あり。しかも、ため息のメロディーが聞こえなければならない。言うこと聞かない車がいて、少しスクランブル状態に陥りそうになる。どうなるか心配したが、交通量が戻り、気を取り直して、ロマンチックなメロディーに身を委ねる。落ち着いて自分の思いを語っている。

サン＝サーンスの「トッカータ」ニギヤカな曲である。開始後スグに、アドレナリン全開、ハイな状態になる。没頭して突進する。トッカータの部分強調する。何度も何度も積み重ねるがシツコサを感じない。驀進だけど野蛮なものでナイ。遊び心あふれるサワヤカな気持ちの高揚である。快演である。弾ききっている。ワヤワヤでモヤモヤした混沌としたものを整理して吐き出している。弾き手の論理か、イヤ聞き手のものか。

ヨハン・シュトラウスの「春の声」どこかで聴いたことのあるワルツ。先生の協力もあったためか、思いが強く、絶対に演奏したい曲だったらしい。お気に入りのアンコールピースにするのか。嬉しそうな演奏に引き込まれてイイ気持ちになる。再現部はすごくサワヤカである。練習してホヤホヤなんだろう。力が入りメリハリが効き過ぎて、タンゴの様に聞こえたりする。おそらく、これから何回も聴けると思っている。曲がどう成長していくのか楽しみである。

演奏後に、立川志の輔さんの落語があったがパスした。嫌いなワケでないが、リサイタルで勢一杯だった。ついでに、志の輔さんを聴いたら失礼だと思った。私自身のアタマのキリカエができない不器用さ、容量不足、ユウズウのなさ、ヤワな神経をウラム。志の輔さんすみません。いつか、落語を聴かせていただいて感想を書きたいと思っています。

モーツアルト：トルコ行進曲(ピアノソナタ 11番 イ長調 K.331 第3楽章)

リスト：ため息(3つの演奏会用練習曲 3曲目)

サン＝サーンス：トッカータ(6つの練習曲 2集 Op.111 6曲目)

